

火星



七曜抄

山尾玉藻

冬牡丹まで五六歩の日向なり

病んですぐ妬みごころの滑子汁

お降りや土佐の潮の立ち上がり

枯葦の風をうしろに初写真

手毬唄聞こゆる部屋に待ちみたり
隣人とエレベーターに松の内
松過ぎの綿虫として流れけり
姉小路曲れば霜を掃いてゐし
日溜りに貝塚のある寒さかな
冬木叩けば快晴の音したる

玉藻俳句鑑賞

鴨たちの胸雪暗ゆきぐれを押し合へる 玉藻

〔火星〕平成十四年三月号より

鴨は十月ごろから渡ってきて春まで日本に棲む。寒い朝ごとに鴨の数が増えている。パン屑など持ってきて近づくこと集まってくる。池の遠くにいる鴨もあわてて飛んで集まってくるのが可愛い。「胸 押し合へる」に鴨の様子がよく見える。

雪昏は雪の降りそうな空の暗さである。心たのしい暗さ、と雪国でない地に住む者は思う。
(典子)



火星作品

山尾玉藻選

竹立てて冬菊のまだ括られず
山畑の葱の葉先のみな折れて
ひよつとこの面と出くはす神無月
寒晴の傾いてゐる地藏さん
哲学の径の木の瘤寒さうな
猪舁くと冬の青空ぬけるほど
朴落葉裏がへしては山眠る
下るさは綿虫なんぞ吹きながら
水鳥の群れゐるままに流れをり
ぜんまいを桶にもどせる冬至寺
夫が耳吾が耳遠し枇杷の花
日の匂ふ十一月の櫟山
老ノ坂越ゆるすなはち霧襖

宝塚 杉浦典子
兵庫 田中英子
八幡 吉田島江

けん玉の突棒に冬来てゐたり
にはとりの目玉の乾く石落日和
初時雨夢寐に聞きをり生きてをり
幻の如く時雨の虹立てり
大根刻む母の無口を怖れをり
爛熱うせよ夕刊を持ちて来よ
長き夜の星に韻きのある如し
搗き白の底のさみどり冬の虫
風上にぎいと首向き枯蟪螂
五つ六つ菜虫をつまみ選挙の日
鳥渡る海に向きたる大時計
もの言うて顛顛こつと冬に入る
お堂より数へてゐたり雨の鹿
掌にゆつくり乗りし鹿の息
一力の釣瓶落し竹矢来
小春日の鎧のやうな吉野杉
法然院菊の乱れに陽のあたり

芦屋柳生千枝子

明石戸栗末廣

八幡飯塚糸子

選のあとに

山尾 玉藻

「石路日和」と「乾く」はやや即き過ぎのようにも見えるが、これで一句と成つたのも確かである。花石路は曇り日には曇りらしく、日和には鮮やかに見えるものだ。「石路日和」は空気の澄んだやや乾燥した日、鶏との距離感が程好い。

爛熟うせよ夕刊を持ちて来よ 柳生千枝子

最近満八十歳を迎えられたと聞く。美意識の勝つた作者で、今までこう言う作品にお目に掛かったことがない。俳譜味充分、俳句的にいい齡を取って行かれるのであろう。

五つ六つ菜虫をつまみ選挙の日 戸栗 末廣

「五つ六つ菜虫をつまみ」は「選挙」に対する普通生活者の身の丈である。この日に別の大事な用があれば「選挙」に行かなくても済む程度のことである。選挙も平凡な生活者にとっては単なる日常のひとつ駒である。

掌にゆつくり乗りし鹿の息 飯塚 ゑ子

奈良吟行の折の句であるが当日の句会には出句されていない。やはり「ゆつくり乗りし」の表現は即吟では捉え難いであろう。間違はなくこの鹿は孕んだばかりの牝鹿であろう。作者との臨場的な一体感が感じられる秀句である。

竹立てて冬菊のまだ括られず 杉浦 典子

景をそのまま述べた形になっているが、表現に一句の呼吸のようなものが感じられる。句意は明瞭、竹は立てたものの未だ括るには惜しかったのであろう。菊という花は盛りは勿論、枯れ始めてもそれなりの気品がある。この句の裏に菊の本位を捉えることが出来る。恒星園作品のへ川舟に炬燵の支度してをりぬも佳い作品である。

猪舄くと冬の青空ぬけるほど 田中 英子

十二月号の「奥播磨へようこそ」で大東由美子さんが猪狼の模様を書かれていて興味深かった。作者も一緒に見に行かれたのだろう。掲句は猪を得ての戻りの景である。「空ぬける」と言う常套的な措辞が収まっているのは、「猪舄く」と言う大事に因るものである。獵師達の誇らしげな顔が見えてくる。

にはとりの目玉の乾く石路日和 吉田 島江

嵐亭の青き木賊や十二月 城 孝子

「嵐亭」と言う固有名詞と「十二月」と言う大雑把な季語とを、「青き木賊」で結び付けただけの単明な句である。「嵐亭」と言う老舗料亭には刈らずに残しある「青き木賊」が似合う。「十二月」と言う季語には、師走の忙しさよりも落ち着いた冬の季節感が感じられる。

二回目の笛で整列天高し 渡邊 美保

こう言う句を選ぶ時に先ず心配するのは類句がありそうな点である。ただ安心できるのは、句歴の浅い作者にとつてこの発見は間違いない初めてのものだっただけである。誰もが見ていて経験する景を、一句として捉えるのは俳句の醍醐味である。同時作品の「薦紅葉校舎の裏にゐる生徒」も、見たままを素直に詠んだところに手柄がある。

行商の鯛の売れゆく夕時雨 田中 吞舟

「俳句朝日」一月号の九十歳以上の方の作品集があり、参加された吞舟さんは大変喜ばれた。掲句も洒落ではないが寂しさの中に目出度（鯛）さがある。「鯛」の色と「夕時雨」との対称が良い。

時雨では止みてはもぐさ積んでゐる 伊藤多恵子

対象としての景はさほど珍しくもない。しかし「時雨では止みては」の表現は良い。灸を据える人、据えられる人、二人の時間がゆっくり流れている。「積んで」も巧みである。

初雪に濡れてゐたりし東山 松 たかし

「初雪」が降るのを見たのは東山ではなく、恐らく京都の何処かの食堂か喫茶店の屋内からであろう。通りに出てみると東山が濡れていたのである。時間と場所との微妙な違いによって成った一句である。

新松子父子の話 濟みたるか 大東由美子

この「父子」は父と娘ではなく父と息子、それは字面からではなく内容から解る。母親は時として父と息子の話には立ち入れないもの、俗に言う男同士の話なのである。簡潔に述べているが家族としての機微が感じられる。

やはらかく冷たく菜虫生きてをり 高尾 豊子

「生きてをり」に、大根の若葉の頃の青虫ではなくやや寒くなり始めた頃の菜虫ということが解る。「冷たく」と述べているが本来柔らかく冷たいものである。「冷たく」は作者の心情なのである。寒くなるうともむしろここに「菜虫」の存在がある。（以下略）

恒星巻

木野本加寿江

今日祝ぎのにはか句会や菊匂ふ
あれこれと思ふ枕に木菟の来し
冬はじめ市場のキムチてんこ盛り
片付けをほつたらかして紅葉寺
綿虫をつかみそこねし菊の前

加古みちよ

小池 楨女

やや寒の皇宮警察蹤いて来る
日を吸ふて十一月の象の鼻
冬紅葉風急ぐとき色増しぬ
犬の名の葉袋とコスモスと
夜咄の小燈一つ増しけり

バス降りて松の参道初時雨
初冬の母の袖無し羽織りけり
蕾持つ菊の支柱のゆがみをり
山門の真柱に触る今朝の冬
夢殿に続く土塀や冬に入る

金澤 明子

嵯峨根鈴子

てのひらの柿の重さの定まれり
満たされてレモンいろなる夜のレモン
数珠玉を摘みて夕べを濃くしたり
菩提子を拾うて振りぬ指二本
シューマンの「竹馬」を弾く陽ざしかな

やすやすと人を逝かしめ葱刻む
十夜婆けむりのごとき息をせり
ごつそりと出し炭焼と残る犬
しんなりと皮手袋に愉さるる
狐火や拝みては貼る万能薬

獅子座

山尾玉藻推薦

吉田康子

綿虫を庚申堂に置いて来し
蒲の穂のほころびに冬晴れにけり
ピラカンサ丸く刈りをるちやんちやんこ
小春日の子のくつしたの湿りかな

山田美恵子

堀博子

山の風柿むきし手のきしと鳴る
綿虫の麓に下りて来し安堵
配られし軍手に山の眠りある
明日歩くための体操冬銀河

切り岸に日差しを返す樫紅葉
蓑虫の身を晒しある日向かな
冬瓜の墓石のごとく畑にあり
綿秋の海に座しゐる若狭富士

丸山照子

城尾たか子

島人に大き木の実をもらひけり
カヌー漕ぐさしばのこ糸のほかあらず
磯鳴やわが足跡に日の恵み
旅人に風のおさまる破れ芭蕉

天高し石ごろごろと積まれあり
銀杏の落ちてまぶしき道となり
花園のごとしペットの供養塚
小春日の真中に千手観音像

加藤君子

河崎尚子

裏日本吹きあぐねたり秋の風
飲みすぎを少ししたしなめ石露の花
道路迄はみ出し葛の遊びをり
京出でて刈田ととのふ車みち

ハンガーのウエディングドレス冬すばる
花嫁の投げそこねたる冬の薔薇
白狐裘肩抱くやうに着せらるる
儀式果てし扉の外や冬霞